

日露戦役従軍日誌にみる戦闘の様

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【第三回】は、弓張嶺の夜襲です。師団規模での夜襲成功は戦史史上初の事です。

八月二十二日晴天、滞在、午後八時命令あり。当中隊は前進道路の偵察のため午後九時出発す。

二十三日晴天、午前五時我が前哨線前の高地を占領す敵は、我に向かって射撃す。我が隊戦いの目的にあらずして、道路偵察の為めなるにより応戦せず。午前十一時二十分帰着す。

二十四日晴天、滞在にて午後一時半頃第十二師団の散砲に中隊は増員に至りたり。その他別に記載することなし。

八月二十五日晴天、午後七時軽装にて整列して聯隊は河家堡子に集合、約三時間余り休憩し午後十一時頃前進を開始したり。月は旧七月の十五日にて煌々として輝くこと秋晝の好、晴天の如く。警戒前進中、應家堡子付近より斥候衝突して、益々敵前哨防禦山の麓において、部隊は暫時休憩し、これより中隊縦隊、側面縦隊の隊形をなし、第一・第三大隊は第一線、第二大隊は予備隊、第一大隊は右翼、第三大隊は左翼。密集隊形を作り益々弓張嶺に向って突撃準備の隊形をなし前進し、約千メートル前進するや斥候は衝突したり。

密集隊はいよいよ静粛にして、才場まで前進す。突撃に転じ一斉に高声をもって突撃をためす。大地山谷も震動し敵は猛烈なる射撃をためす。我が隊は高声のほか一言も発せず敵弾は殊に夜間ゆえ命中すること甚だ少なり。

別に続く手前右五面まで突撃する敵は、接近するにしたがって猛烈に、戦傷者は正に頂上に別れんとて、敵死する者無数。時に聯隊長殿に、天皇陛下万歳の声、山谷も崩れるばかりに高声す。

八月二十六日、午前五時四十分頃我が第十六聯隊の占領地となり。敵兵は強国の抵抗を以て固守せんとして、我が隊、山の上に至るまで退却せず。然れども我が隊の猛烈ざるにたがわず退却す。払暁、我が隊は敵の退却するを追撃するは愉快なり、一層爽快の意味を有す。

午前八時、各部隊の整頓及び人員検査の後休憩したり。我が隊の負傷、第九中隊には死者七名、負傷者十四名、敵の死傷者は取り調べ中なり。第三旅団も第十五旅団共に占領したりと、近衛師団の方面は敵兵勇敢なるため一時退却の様。遂に予定の地点を占領することを得ず。翌日攻撃占領す。第十二師団は我が師団の右翼にありて夜襲後を待つて予定の如く攻撃開始す。正午頃占領す。午後一時三十分頃より大雨なり、午後七時三十分頃弓張嶺の麓に宿営す。

二十七日曇天、我が聯隊は午前七時四十分出発、我が砲兵陣地の地点において集合、暫時休憩昼食す。後前進を起すや、第三大隊は旅団の急予隊として、約千メートル前進し部落において暫時休憩時に我が砲兵は、激烈なる砲門を開き敵兵を退却せしめたり。その後歩兵は前進す。第三大隊は予備隊たりしが故に敵の暮営地点まで前衛となり左翼の高地を占領したり。第三旅団は尚右翼を前進し居りしに、敵はすでに撃退せられて、退却中を第三旅団及び第十六聯隊第三大隊第十一・第十二中隊の射撃を受け、右翼より第十二師団の発砲を受け袋の鼠の如く。多大の損害を得て、狼狽して漸く河を渡渉し日没に退却せる者の如し。午後八時三十分その地点に幕営したり。

以上弓張嶺の夜襲でした。